
レギオンの将

子儀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レギオンの将

【Zコード】

Z7976Z

【作者名】

子儀

【あらすじ】

異世界に迷い込んでしまった青年は、数年前に神隠しとなつた幼馴染が同じ世界に辿り着いていたことを知る。しかしその世界の住人は決して来訪者を受け入れようとはせず、時に狩り立ててきたのだった。来訪者達の生きる場所を手に入れるため、青年は戦場に立つ。“人形に生命を与える魔法”が生み出す無数の軍勢を率い、自分達が世界に抗うことを高らかと告げるのだった。

RTS

01話 来訪者

朝日と共に、その都市は活動を始める。

巨大な門が開かれ、外で夜を明かした旅人達と次の街への移動を急ぐ商人達が、ひつきりなしに行き交う。

気の早い露天商が店を広げ、声を上げて客を取り合つ。

決して裕福ではないが、笑い声の絶えない街。 有能とまでは言えないものの、誠実で慕われる為政者の人となりが見えるようだ。

その都市には、他の街ではあまり見ることのできない奇妙な施設があつた。

直径5mほどの白い円形のステージ。一枚の巨大な岩で出来ていると思しきその表面には、ステージ全体を覆う巨大な魔法陣が描かれていた。ステージの周囲は若干の距離を置いて身長の倍はありそうな高い壁で囲まれ、その上部には銃眼のようなスリットが等間隔で刻まれている。

全体的に見ると所謂コロシアムのような形状をしているが、そこには娯楽施設のような一種の華やかさや遊びといった要素は欠片も見当たらず、街の中にあるにも関わらず戦場のような緊張を感じさせる佇まいであった。

現在、中央のステージ場には何の姿も見えない。

しかし、取り囲む壁の上の通路には、間隔を置いて数人の兵士が常に立ち、ステージに向かつて監視の目を光らせているのだ。

壁を城壁とすれば、兵士は歩哨といったところか。だが、その歩哨は外敵に対してではなく、内側に対して警戒していた。

この施設 正確には中央のステージのある場所は、“魔人の門”と呼ばれている。

門というが、それらしい設備は何も見当たらない。稀に勘違いさ

れるが、魔方陣の刻まれたステージは“魔人の門”に対する迎撃設備として、後から設置されたものである。

あくまで“魔人の門”とは、コロシアム中央の空間を示す名称である。

最初に“門”が開いたのが確認されたのは、100年ほど前。その際に現れた異形の住人によって、その時点である程度発展していだその都市は少なからぬ被害を受けた。以降、平均して年に1度程度の頻度で、“門”的向こうから異形の住人が訪れている。

この施設は、来訪者から街を守るための、文字通り前線基地なのであつた。

そして今日。

“門”の空間が歪み始め、新たな来訪者の訪れが告げられた。

「何……が……？」

男はうずくまつたまま、ひどい船酔いのときのよつた頭痛と吐き気をこらえ、周囲を見回す。

その瞳孔は横に細長く、頬から首にかけて、そして肘から先には細かいウロコが生えているのが見て取れる。

男が庇うようにして抱きかかえているのは、妻子らしき女性と赤子の一人。女性は責ざめた顔で固く目を瞑り、震えていた。

意識がだんだんとはつきりしていくにつれ、男は武装した集団に周囲を囲まれていることに気がついた。

揃いの胴鎧にヘルム、槍に剣と妙に時代遅れな格好をしていて、一瞬何かのイベントかと安心しかけ、兵士達の異様な緊張感と殺気を感じ取り、半ばパニックに陥る。

ここはどこだ！確かに今まで家族と買い物を楽しんでいたはずなのに！

叫び声を上げようと息を吸い込んだとき、胸の奥に大きな力が流れ込んだように感じた。

「ぐつ……あああああああつ！」

一瞬感じる、全能感。体が焼けるように軋み、作り替えられてい

見れば妻も似たような感覚があるのか、こちらの服を掴む手が何かをこらえるかのように強く握り締められる。

幼い息子もまた、何かを感じたのか大きな声で泣き始めた。

周囲を囲む兵の中で、とりわけ立派な鎧を着た男が片手を上げた。同時に足元の白い岩に刻まれた模様が光を発した。

息子の泣き声がさらに大きくなつた。心配だ。早くここから離れなければ。

そう思つた瞬間。

小さな風切り音と共に、唐突に泣き声が止んだ。
恐る恐る、腕の中の息子へと手を向ける。

そこには

胸から矢を生やした

骸となつた息子の姿があつた

声の限り叫ぶ。

それを合図にしたかのように、兵士達がこちらへと突進してきた。妻をかばいつつ、夢中で腕を振り回す。体を剣が、槍がかすめて

鱗が剥がれ、血がしぶき激痛が走る。

だがそれでも、男は無我夢中で敵を振り払い、逃げ道を探す。

ずぶり

鈍い音と共に、大量の血が飛沫ぐ。

同時に、腕の中から微かな悲鳴が聞こえ、服を掴んでいた手から力が抜けたのが分かつた。

背中を何本もの刃に貫かれ、ゆっくりと倒れていく妻。

呆然とそれを見下ろした瞬間、一本の槍が腹を貫いた。

衝撃に、動きが止まる。

さりに、一本、二本と次々に体に打ち込まれていく。

あまりの激痛に声をあげようとして、喉の奥から溢れた血を大量に吐き出した。

最後に、水平に薙がれた剣が首を落とし、男はゆっくりと倒れる。

絶望に見開いた眼に、恐怖に強ばった兵士達の顔を映して。

01話 来訪者（後書き）

1話にエピソードを挿入しました。
なんとなく世界観を感じていただければ幸いです。

旗中ハタナカ 将貴マサキ の日覚めは最悪だった。

「……うー……」

がんがんと響く頭痛をこらえ、のつそりと起き上がる。

昨晩から派手に吹き荒れていた台風のせいで眠りでも浅かつたのだろうか。家も妙に軋んでいたような気がする。

ちょっと睡眠時間が減るだけで体調を崩す身体が憎い。台風の間の鬱憤を晴らすかのように、カーテンの隙間から無駄に元気に差し込む日光が恨めしい。

元々あまり明るいのは苦手なのだ。締め切ったカーテンはそのままに、トイレに向かった。

先祖がちょっとした地主だったということで無駄に広い旗中家は、祖父母が亡くなり、後継であつた両親が仕事の都合で海外生活を余儀なくされ、通っている大学が近いという理由で将貴に管理を任せている。正月は親戚が集まり賑やかな自宅も、正直一人では持て余している。

体調が優れないときにこの長い廊下を移動しなくてはならないのは億劫だし、トラブルが発生したときの対応が厄介なのだ。

特に今日のように。

「ん？」

パチンパチンとトイレのスイッチを切り替えるも、一向に電気が点く様子がない。

思っていたよりも前日の台風はひどかったのか、停電であればはやく復旧してくれればいいが。

そんなことをうまく働かない頭でぼんやりと考えつつ、用を足す。手を洗おうと蛇口をひねったとき、今度は水も流れないことに気が

ついた。

（そんなに台風はひどかったのか……）

朝からトラブルの連続にうんざりしつつ、居間へと向かつ。

（庭は大丈夫かな）

母屋は数年前に改築したから余程じやなれば大丈夫だと思うが、明治の頃からあるという蔵は正直心配だ。以前に地震が起きたときは中の棚が一部壊れて大変な目にあつた。

とりあえず様子を見るつもりでカーテンを開け、庭の向こうに田を向けた将貴は、諸々のトラブルは、目の前にある光景の余祿であったことを悟つた。

庭を囲む背丈をわずかに越える、敷地を囲つた堀。

昨日までその向こうに見えていた、見慣れた街並みは姿を消し……一面の森が広がつっていたのだった。

「……ないわー」

思わず呟きつつも、意外に自分が冷静であることを将貴は感じていた。それは一種の防衛反応なのかもしれない。だが、何が起きているのかを確かめる必要がある現状では、それがありがたかつた。とりあえず外に出てみよう、と考える。

目の前にある窓からでは高い堀に遮られて、庭の一部と立ち並ぶ木々の方しか見えない。どの程度の異常かが、確認できないのだ。

2階に上がるのもいいかもしれないが、周囲をぐるりと見て回るために部屋をいくつか回らなくてはならず、面倒なのでやめた。

ここからすぐに外に出ることも出来るが、堀の外に出るには結局玄関を通るので、ひとまず玄関にまわり靴に履き替えることにした。

少し迷ったが、普段使っているスニーカーを履くことにした。壙の向こうに見えた森がもしも続いているのであれば、しまい込んでいたトレッキングシューズを引っ張り出す必要があるかもしない。だが、とりあえずは壙の向こうをぐるりと一周してみて、それから考えようと思う。

ドアノブに手をかけ、そつと押し開ける。

気圧差でもあつたのか、ドアの隙間から外の空気が吹き込み……息を吸つた瞬間、将貴は喉が燃え上がつたように感じた。

「ぐつ……！」

熱はそのまま胸に燃え移り、肺を焼く。

血管に取り込まれ、心臓が激しく脈打つ。

忘れていた頭痛がぶり返し、思考する余地を奪う。

荒い息を継ぐことで、さらなる熱が取り込まれる悪循環に、耐え切れず膝をつく。

視界が明滅し、大きく咳き込んだあと、将貴はその意識をゆつくりと手放した。

02話 漂流初日（後書き）

前話にエピソードを挿入したついでに、元01話、02話を結合しました。

ちょっと短さが気になつてたので。

これで分量的にはバランスとれたかな。

将貴が意識を取り戻したのは、太陽が天頂にさしかかるつかといふ時だった。

玄関タイルの冷たさを肌で感じ、自分がうつ伏せに倒れていることに気づく。

「…………」

喉の奥に違和感があるような気がして一、三度咳をしてから、意識を失う直前のあの体の痛みが消えていたことに気がついた。朝起きたときから続いていた頭痛も、きれいに消えさっている。むしろ普段より調子がいい程ではないかと感じる。

先ほどの異変は、ドアを開けた直後に発生した。ということは外に有毒なガスでも溜まっていたのだろうか。朝の不調も、部屋の換気口あたりからわずかに外気が入ってきていたのかもしれない。そうであれば、外に出るのは非常に危険だと考えるのが正しい判断なのかもしない。

だが。

将貴は開いたままのドアから、外へ目を向けた。

開きかけた所に寄りかかつたため、そのまま押し開いていたようだ。そして倒れている間、将貴の体をストッパー代わりにして、ずっと開きっぱなしになっていた。

（毒ガスか何かだったら、とっくに死んでるはず……か）

少なくとも、今は外に出ても問題はないようだ。

異変の原因がなんだったのかは分からないが、有毒なガスが流れてくる事があるのならば、長時間外に出るのは危険かもしれない。

一瞬そう考え、

（いや、それはないかな）
すぐに取り消した。

一呼吸であれだけの反応をする気体が毒であれば、今現在体に何の不調もないことがおかしい。少なくとも倒れた時点で今のようにドアが開いてしまったのであれば、そのまま死んでいたはずだ。たまたま吸つた瞬間、致死量に至らないぎりぎりの量のガスがドア付近にあり、自分が吸つた直後にどこかに流されていった。そんな不自然なことが起きていたとは考えにくい。

それに思い返してみれば、倒れる直前の体の熱。

あれはそう、程度は違つても、強い酒を一気に飲んだ時の熱に似ているような気がした。

もしかしたら異変の原因となつた物は変わらずここにあるが、体が慣れて処理できるようになったのかもしれない。気持ち悪いほどに急激に調子を取り戻している体を確認しながら、そんな予感がした。それと同時に、もしかしたら体質が合わず、そのまま目覚められなかつた可能性があつたことを考え、ぞつとしたのだった。

いつまでも玄関に座り込んでいても仕方ない。

外に出ようとしていたことを思い出し、将貴は立ち上がりうとじて、それに気付く。

「……なんだ、これ？」

姿見に映つた自分の顔。そこに見慣れぬものがあつた。

「……痣、か？」

右頬から首筋にかけて、トライバルのような曲線を描く黒っぽい痕ができていた。下端はシャツに隠れていたが、めくつてみると鎖骨の下くらまで続いている。

痣かと思ったが、いつ出来たのか覚えがない。先ほど倒れたときにぶつけたのかと思ったが、痛みもないし偶然できたにしては規則性のあるようにも見えた。

（まあいいか）

気にして何が変わったわけではない、と痕について考えるのは止めた。

「切り替えの速さは自分の長所である、と将貴は考へて居る。

軽い足取りで外に踏み出し、飛び石を踏みながら正面にある門へと向かう。

（やっぱり何もないな）

本来であれば門の向こうには向かいの家がすぐ見えるはずだったが、今では影も形も無い。あるのはちょっととしたスーパーの駐車場程度の広さの広場と、それを囲むようにして広がっている森だった。近づいてみると、どうやら敷地の境界で途切れているわけではないことが分かる。考えてみれば当たり前なのかも知れないが、旗中家というエリアが森になつていないのでなく、森になつていらないエリアにたまたま旗中家の敷地があつたというのが正しいようだ。敷地の外側、舗装道路も1車線程度の幅は残っていることが確認できた。

境界線を田でなぞるついで、あることに気が付く。

「これは……円、かな」

緩やかな曲線を描いている境界線は、無作為なものではなく、綺麗な弧を描いているように思われた。

今いる場所から見える範囲では中心がどこなのかは確認できないが、始めの予定通り家の周囲を回ると、ついでに境界線を追つてみることにした。

「はあ、どうしようつか……」

将貴は塀にぽつかり空いた穴を田の前にして、ひとりじめちた。

境界線が土塀の一部をまたぐ形になってしまったため、途中で欠けてしまっていたのだ。正方形に近い敷地は、円（？）の中に綺麗

に收まらなかつたようで、角の部分に1m程の穴が開いてしまつて
いた。

もしかしたら危険な野生動物がいるかもしだれない。出来ることな
ら塀はちゃんとした形で残つていて欲しかつたのだが。

「考へても仕方ないか。後で適当に土嚢でも作つて積んでおこう」

確かに布袋が結構余つてたな、と呴きつつ、先へ進むことにする。
一人で土嚢を作ることを想像するだけでうんざりするが、自分で
出来る程度の補修は怠らない方がいいだろうと考え、同じような破
損を見つけたらなるべく覚えておくことにした。

簡単に周囲を回つた結果、周囲の様子をある程度把握することができた。

まず、境界線は大雑把に見た限りでは当初の予想通り、ほぼ円状
に引かれているらしい。中心点を調べるのは後回しにしたが、恐ら
く正門から向かつて左手側にある庭のどこかを中心としていると思
われる。直径が敷地の対角線より若干広い程度なので、入りきらな
かつた反対側の2角が欠けていたことが分かつた。

正門のある側を除いた三方は森になつてゐる。少し入つて見た限
りではしばらく続いているらしく、そこまで樹木の密度が高くない
にしても、奥まで見通すことはできなかつた。木々の高さは30m
ほどはありそで、2階に登つた程度では枝葉が邪魔をする分むし
ろ近い距離までしか見えない。それぞれの方角に何があるかについ
ては、それなりの準備を整えてから探索しに行くことにした。

正門側にある広場は、脛ほどの高さの草が一面に生えているが、
日当たりも風通しも良く、昼寝をするには絶好のロケーションと言
えた。後でハンモックなどを起きたいなど、呑気なことを考える余
裕はできてきた。何より広場の反対側から、川が流れているのを見
つけられたのが大きかった。一番の不安が飲み水の確保だつたため、

当座の不安は解消できた。食料は保存食が数日分があるので、あとは釣りか、罠で何か獣を捕まえるしかないかと考える。

些細なことではあるが、正門側に広場やら川やらがあるおかげで、利便性の面では助かるな、というのが将貴の感想であった。

とりあえずは、周囲の地形確認と飲み水の確保をするだけで、日が傾きかけている。

案の定電線は途中から寸断されており、灯りを確保することは出来ない。懐中電灯はあるが、なるべく電池は節約したい。日が暮れた時点でさつやと寝ることにして、明日はもう少し遠出をしてみよう。

そう決め、今日は準備のために家へと戻ることにした。

03話 復調（後書き）

01話、02話は連載の投稿の仕方の確認もあつたので短めだったのですが、今回から少しボリュームを増やします。

投稿済みの話についてもちょっと物足りないので、もうちょっとHピソード入れようかとは思っています。

今のところファンタジー要素皆無の漂流物っぽいですが、そういう話を動かしていくので、もう少々お待ちください。

将貴が旗中家周辺の探索を本格的に開始してから、早くも一週間が過ぎた。

地図はなく、周囲は完全に森に囲まれ、どちらを向いても同じような景色。道といったら精々一人分の幅しかない、曲がりくねった獸道しかない状況で森に分け入るというのは、予想以上に神経をすり減らすものであった。

方角については、漂流前と同じように方位磁針を頼りにすることが出来たのが、不幸中の幸いだ。

将貴の手元には、この一週間で作った、本拠地周辺の地図があった。

地図とは言つても、適當な方眼用紙に、大雑把な地形と番号が振られたものである。

将貴は、蔵にあつた大量のロープと塗料、そして先に述べた方位磁針を利用して、周辺の森を等間隔に、格子状に印をつけて回った。その上で、特徴的な地形や構造物を地図に落としたのだ。現状ではおよそ2km四方といったところだろうか。もちろん縮尺や方向については、使い慣れた現代社会の精密な地図と比べるのもおこがましいものだが、何もないよりは、はるかにいい。

将貴は、地図の出来を確認し、これまで行なつてきた“面”的探索から、新たに“線”的探索に切り替えることにした。少なくとも、多少遠出をしたところで、再びこの家に戻つてくることは可能だと判断したのだ。

始め、世界は自分の家を残して、すべて消えてしまつたのかと思つた。

そして、逆に世界から自分が消えたのだ、と確信した。……少な

くとも両者は表裏一体で、あくまで主観的なものではあるが。

根拠となつたのは、円状の境界線、その中心点がどこにあるかを特定したときだつた。

将貴はその場所を覚えていた。

もう15年近くになるだろうか。

小学生の頃のことなどほとんど覚えていない。

だがあの日、あの瞬間のことだけはいつまでも忘れる事がなかつた。

麻間 アサマ 三尋。それが彼女の名前だ。

歳は確か、当時14、5歳だつたか。

祖父母の家の近所に住んでいた三尋は遠縁の子だつた。年の近い子供が他にいなかつた事もあり、帰省したときはいつも遊んでもらつていた。将貴自身もすっかり懐いて、田舎にいる間はずつと後ろをついて歩いていたものだ。

「大きくなつたら、みー姉とケッコンする！」

……とは、子供の頃にはよくある口約束だつた。

今思えば両親たちは妙に乘氣だつたし、当時の自分もまったくそれを疑つていなかつた。

そのまま数年たつていれば、少年特有の羞恥しさが生まれて、もつと違うことを言つていたかもしだれないが。

だが、彼女は突然に姿を消した。

文字通り、突然に、だ。

祖父母の家の庭で、二人で遊んでいた。鬼ごっこか、隠れんばか。

それともただおしゃべりをしていただけだったか。その田向をして過ごしていたのかはよく思い出せない。

立ち止まって、話して。

ある瞬間、フィルムを繋ぎ変えたように、三尋の姿は将貴の田の前から消えていた。

その後、親戚たちは当然のように大騒ぎになり、大掛かりな搜索も行われたが、何の手掛りも掴むことはできなかつた。

唯一の目撃者であつたはずの将貴の証言も、突然目の前から消えた、などと言わても信じられることはなく、一時期は嘘つきの厄介もの扱いをされたこと也有つた。

数年後、祖父母が共に亡くなり、家を手放すという話が出たとき、一番抵抗したのが将貴だつた。

この家まで無くなつてしまえば、三尋との繋がりも完全に消えてしまつと思つたからだ。

そして今。

一度は切れた糸が、再びつながつた。

境界線の中心点は、あの日三尋が消えた、あの場所だつた。人一人に対して、家一件。

規模は全然違うが、起きているのはきっと同じ現象だ。^{二尋}ならば、この世界のどこかに彼女がいるかもしれない。

そう考えてしまつた時点で、将貴の中から、“帰る手段を探す”という選択肢は無くなつた。元の世界への未練というものが不思議とまつたく感じられなかつた。三尋を見つけることが出来た後ならばともかく、今この瞬間、「今すぐ元の世界に帰る」〇・「一生この世界に残る」の二択を突きつけられたならば、迷わず後者を選ん

だだろー。

“この世界”と表現したが、将貴はこの時点で、今いる場所が現代の地球上ではないと判断している。10数分ほどであるが、一日が24時間よりわずかに長いことが分かったからだ。

今起きているのがはるか過去か未来へのタイムスリップか、並行世界か異世界へのトリップか、それともそれ以外の何かなのかは分かつていい。だが、そのどれであるかは、あまり関係ないと思っている。帰れる場所ないのであれば、どれであろうと同じだ。（たまたま現地の誰かに拾われて、いろいろ教えてくれるなんていふ展開であればある意味楽だつたのにな）

様式美ではあるが、世の中そつは上手くいかないこともある、と苦笑した。

そもそもこの世界に人がいるのかも分からないのだ。

探索を開始するにあたり、将貴は決めている事がある。

それは、この家に戻つてくるということだ。

身一つでこの世界に来たのならともかく、折角家があるので。ここを拠点にしない理由がない。

それに、自分からは見つけることができなくとも、相手の方から相手、と呼べる存在がいれば、だが この家を見つける可能性もあるだろー。ただ、それが害意を持つている相手の場合は涙を呑むしかない。

なので、数日単位でこの場所を離れるのはいいにしても、戻つて来られるように準備してきたのだ。

将貴は引っ越ししてきた40㍑のリュックに数日分の食料や毛布、調理道具を始めとした荷物を詰める。服装はポケットの多いベストに、足元はトレッキングシューズという若干ラフではあるが、

典型的な登山スタイルだ。父親が飽きっぽいタイプで、用具と本を一通り集めて満足する、ということを繰り返してきたのが助かつた。そして、狩猟道具兼武装として、山刀とスリングショット いわゆるパチンコを腰の後ろに下げる。

どちらも祖父由来のものである。

山刀はグリップにナックルガードがついたもので、刃渡りが40cm弱。刀身は先端ほど幅広になつており、刃先が剣鉈（刀の切先ののような形状）になつたものだ。数十年に渡つて数多くの獣の血を吸つてきた逸品である。これで熊を仕留めたことがある、と言つていたが多分冗談だらうと思う。洒落にならないサイズと威力（切れ味というよりもそちらの方がしつくり来る）のため、今まで蔵で封印されていた代物だ。

スリングショットは祖父自作のもので、オーソドックスなY字型の先端が手前側に曲げられたものだ。最初は子供のおもちゃとして作り始めたのだが、凝り性の祖父がだんだん悪ノリを始め、安定性強化のためにグリップを改造し手首の固定器具を付け、命中率強化に照準を付け、威力強化でゴムを取り替えとしていった結果、試し打ちの的にした空き缶が爆裂したので、これも封印指定とされたいた。

準備が整つたので、外に出る。

当然鍵は閉めない。無くす危険もあるし、そもそも盗みに入る人がいるかも怪しい。いたらいたで結局壊されるだらうから、むしろ開けておいた方が建物にダメージが入るよりはマシだ。

とりあえず向かう先は、広場の脇を流れている川をひたすら下ることにした。

人に会うとしたら川沿いのほうが可能性は高いだらうし、獣道しかない森の中よりは歩きやすいだらう。視界も開けてるし、帰るときは逆に川を遡れば迷わない。上流方向を選ばなかつたのは、人里

離れた川の上流に向かつても、森が深くなるだらうと思つたからだ。地球でも大陸であれば複数国家にまたがる川などザラにあるのでこの考え方はいかにも日本人的かもしだれないが、この地点の川幅が2m程度であることを考へると、下流に向かつたほうが可能性としては高いことは確かだ。

当面の目標としては、川に沿つて3日分進み、何も見つからなかつたら、少し奥に入った位置から川と並行に戻り、マップを埋める。何か変わったものが見つかった場合は、その場所への距離次第で、即立ち寄るか後回しにするか考へることにした。

04話 出発（後書き）

それぞれの行動にはなるべく根拠を持たせ、展開の都合のための飛躍的な行動は取らないようにしたいと考えています。

とはいっても知識が豊富な方ではないので、こういうシチュエーションでこの行動はおかしい、とか、こういう場合のセオリーは、とかそういう意見がございましたらお待ちしております。

しかし、登場人物がいないせいで見事に地文ばかりですな。

次回あたりでキャラ増えます。

しばらく歩いてみた限りでは、この川は平野をずっと緩やかに流れているもののようで、急な勾配に回り道をしなくてはならない羽目には今のところなっていない。少し離れれば相変わらずの森だが、川沿いを歩く限りはせいぜい膝丈の草が生えている限りで、歩きやすいのは非常にありがたかった。

（やはり川沿いを選んだのは正解だつたな）

この調子であれば、自分に課した3日の期限内に、思つたより遠くまで進めそうだ。帰りの目印のためのマーキングを手近な木に残しながら、そのように思つ。

快適な旅程に貢献しているのは地形だけではなかつた。

山歩きなどはたまの行事に半強制的に参加させられた時にを行うくらいで、山に慣れているとは言い難い。また高校のときに比べれば運動する機会も減り、体力はずつと落ちている。

なのに、歩いても歩いても、ほとんど疲れを感じる様子がなかつたのだ。

さすがに小走りに近い速度を続けるとだんだん息が上がりつてくるが、少しペースを落とせばすぐに回復する。また、足の疲労についても同様だった。思えば1週間も前からずっとこの体の好調は続いたようだ。急に慣れないどころではない環境の変化があつたにも関わらず体調を崩す様子がなかつたのだ。

異常と言えば異常だが、本人は「空気が合つたのかな」などと呑気に考へている。

考へても仕方のない事であるし、デメリットがない限りは素直に受け入れることに決めた。

幸いと言えば途中で食べられる木ノ実や果物の生る木を見つけられたのも良かった。

最初の1週間で一度ウサギに似た小動物を捕まえることが出来た

が、やはり経験がないために随分と手こずつたものだ。どうしても時間がかかってしまうので、旅の最中は出来れば避けたい。一応某カロリー補給食も持つてきているが、現地調達出来るならそれに越したことはないのだ。味についても文句はない。むしろ好みだつた。種を植えるか……出来れば苗木を持つて帰れないかと真剣に考えた。

それを見つけたのは、本拠地を出てから3日目の昼前だった。比較的若い木が多いのか、本拠地周辺に比べて比較的背が低く、密度も低かつたので気づくことが出来た。

進行方向から斜めに外れた方向、木々の頭越しに見えるダークブルーウンの屋根。色合いとしては決して目立つものではないが、人工物特有のその直線で形作られたシルエットは、森の中にずっといたからこそ目を引いた。

（場所だけ覚えて、今はこのまま先へ進もうか？）

一瞬考え、否定する。そもそも元々決めた3日という括りも、何も見つからなかつた時のためのボーダーラインだ。“何か”が見つかつた今、律儀にそれを守る必要もない。

さらに言えば、さすがに少々人恋しくなつてきた所なのだ。将貴は比較的一人を苦にしないほうではあるが、この世界にもしかしたら自分一人しか人間はないのではないか、という可能性は思つていたよりも精神的な負担が大きいものだ。

川にぶつかりさえすれば後は遡るれば帰れるはずなので、最低限方角を間違えなければ迷いはしないと思うが、念には念を入れて小まに印を残しつつ、将貴は森へと分け行つた。誰かがいてほしい、と密かに思いながら。

木々の間に見え隠れする屋根を追つて森を進むと、1件の家が建

つ開けた空間にたどり着いた。

久しぶりに見る文明の痕跡に安堵し、外観を観察してみる。

その建物は、屋根より薄いライトブラウンの壁面で飾られた、所謂洋館風のデザインであった。遠目では煉瓦作りかと思つたが、近寄つてみると石のように頑丈でありながら、木材のような柔らかみのある奇妙な質感があつた。建築素材に詳しいわけではないが、見たことのない材質に、

(思つていたより発展してゐるのかな)

などと思う。

ちょうど正面側に出たようで、そのまま玄関口と思われるドアに向かい、ある事に気づいて眉をひそめた。

ドアから軒にかけて、50cmはありそうな大きな蜘蛛の巣がはつていたのだ。しかも出来てからそれなりに日数の経つていると思われる、干からびた虫が張り付いたままのものが。

蜘蛛の巣は意外に早く出来るものだとよく聞くが、さすがに数日でこのサイズの巣を作つた上、かかつた獲物が乾燥するまで放置されたりはしないのではなかろうか。

近寄つてみると玄関先はいつから掃除していないのかと思うくらいに汚れ、長いこと使われた痕跡がないように思つ。念のため何度か強めにノックをしてみるが（ノックの習慣があるのかは分からぬいが）、しばらく待つてみても人の気配がない。やはり無人なのだろうか。

鍵がかかつてゐるのかドアが開かなかつたため、そこから入るのは早々に諦めた。他に入れそうな入口か窓が無いか探しながら、壁伝いに回り込んでみることにする。

(結局こっちに来たときと同じことをしてゐるな)

この世界に漂流した初日のことを思い出しながら密かに苦笑する。正面側、ドアの横に並んでいる窓はガラスがはめ込まれたものだつたが、カーテンが閉められているのか中を伺つことは出来なかつた。こちらも鍵がかかつてゐるようで、開く様子はない。最悪、ガ

ラスを割つて入ることも考えたが、もし中に入いたら無意味に敵対心を煽ることになるかもしれない。それは最後の手段にしておきたい。

結局正面の窓は全滅。さらなる入口を探して回り込み、手前から1つ1つ確かめていくうちに、それに気がついた。

途中で壁の材質があからさまに変わっているのだ。

正面側から続いていたなめらかなライトブラウンの壁材が、建物の2／3あたりで途切れたように消え、継ぎ足したかのような木材の壁面に変わっている。窓もガラスではなく、両開きの木製の戸になっていた。

「もしかして」

ふと思いついて、山刀をシャベル代わりに壁材が変わっている部分の地面を掘り返してみる。

地面に生えた雑草を引き抜き、薄く積もった表土を取り除くと、あるラインを境に、綺麗に土の種類が変わっているのが分かった。嘆息する。

それ以上掘り返そとは思わなかつたが、この境界線は恐らく円状に続いているのだろう。

「（汗）もうちと同じ、お客様か」

「よつ……と」

裏側の継ぎ足し部分はセキュリティについてはかなり適当だったようで、門のかかっていない窓を見つけて侵入する。

締め切られているせいで薄暗い部屋の中に飛び降り、ぶわっと舞い上がつた埃に軽く咳き込む。やはりしばらく使われていないようだ。光源確保兼換気のために、入つた部屋の他の窓をすべて開け放つ。

部屋の中は壁も床も材木がむき出しで、ログハウスのような作り

になっていた。物置替わりに使われていたようで、大きさもまちまちな木箱がずらりと積み重ねられていた。

そのうちいくつかに小さく文字らしきものが書き込まれているのに気付き、歩み寄る。

「英語じゃないな……どこの文字かな」

残念ながら、将貴の知識ではそこに書いてある文字を読むことは出来なかつた。どこの国の文字かも分からぬ。いくつかの文字はアルファベットに似てるとは思つたが、あいにく西欧圏の言語はさっぱりだつた。それ以外なら読めるというわけではないが。

手近な箱を開けてみると、緩衝材とガラス瓶が詰め込まれていた。他の箱に何が入つているのかかなり気になつたが、荷解きを始めたらいつまでかかるか分からぬので後回しにする。現状、このような加工品の補充は絶望的なので、いいものがあつたら是非持つて帰りたい。

侵入した窓とは反対側の壁に出口があつたので、荷物の隙間を抜けてそちらに向かつ。

出口をくぐると、絨毯の敷かれた幅の広い廊下に出た。どうやらこの廊下から境界線の内側らしい。境界線に削られてむき出しになつた部分は、まるごと取り壊してログハウスにしたのだろう。

そう考え、ふと気付く。

建物自体の広さは拠点としている我が家よりだいぶ広い。従つて建て増ししたログハウス部分も結構な面積に渡つていて、その造りはかなりしつかりしている。少なくとも一人一人で作れるような規模じゃない。10人単位でこの世界に来たのか、それとも建築を頼めるような相手が近くに住んでいるのかもしれない。

この建物自体は放棄されているようだが、滞在を何日か伸ばしてここ周囲も探索したほうがいいか。

そこまで考えたところで思考を切り替え、まずは建物の中を見て回ることにした。

元からある方の部屋をいくつか覗いてみた結果、外観とは裏腹にここは一種の工場、あるいは工房のようなものらしいと思つた。居住にはふさわしくなさそうな、用途の分からない工具や機材がずらりと並んでいるのだ。もしかしたら突き抜けた趣味人の自宅である可能性もあるが。

次に入った部屋は窓がなく、明るさに慣れた目では中が良く見えないが、やはり人の気配はない。ドアから差し込む光もあるが、結構な広さがある部屋のようで、入口付近が照らされるに留まつていた。

荷物の中からランプを取り出し、明かりをつけた。

同時に、部屋の中が照らされる。

部屋の中央には応接間のようにソファーがコの字に並べられ……

「つ！」

人の姿に気付き、息を呑む。

正面の一人がけのソファーに、一人の女性が姿勢よく座つていた。その双眸は閉じられ、色は分からぬ。

肩までの長さのクリーム色の髪に、白い肌。形の良い顎から下は、ボディタッチのような肌に密着した服で覆われているようだ。

「死体……いや、人形？」

呼吸のような最低限の動きすらない影像のように固まつた体を見て、一瞬いやな予感を感じたが、近付いてよくよく見てみればそれは人の姿によく似せた人形のようだつた。

髪や肌の色も相俟つて、どこか西欧風の顔立ち。純白のボディタッチに見えたのは外装らしく、顔の皮膚……に見えた部分と一体化している。胴体はシリエットだけ見るならスレンダーな女性の体型をなぞつており、柔らかそうな質感がある。一方、腕と足は色こそ胴体と同じだがより硬質的で所々に分割線が走つており、とくにその付け根の関節部分は可動域の確保のためか内部の機械部分がむき出しの構造になつていた。

……なぜこんなところに人形が？

疑問に思い、半ば無意識に手を伸ばす。

その指先が人形の顔に触れた瞬間。

指先に熱が弾けた。

「くつ……ああつ……！」

反射的に手を引こうとしても体は動かず、強く噛み締めた口から声が漏れる。

指先から体中の活力が吸い出されるような感覚。

熱が全身に広がり、体中が活性化している。

全身からエネルギーが集まり、そして指先を通して放出されていく。

意外なことに決して危機感や不快感はなく、むしろ絶頂に達したときのような快感があつた。

それが続いたのは一瞬か、あるいは数分、數十分か。軽い虚脱感に朦朧とした将貴から力の放出が止まると同時に、体が動くようになつた。

頼りない足にふらつき、崩れ落ちるようにして後ろに座り込む。

キュイイ……

しばらく荒い息をついていると、唐突に、小さな金属音が聞こえた。

将貴は顔をあげ、それと目があつた。

冷たい光を放つ、水色の瞳。

いつの間にか目を開き、じつとこちらを見つめていた人形。その頬に、いつの間にか自分と同じような形の、黒い紋様が走っていた。全身が白いその姿の中で、紋様だけが妙にくつきりと目に付いた。それは目があつたことに気付き、ゆっくりとソファーから立ち上

がる。

そして膝をつき、人形とは思えない優雅な仕草で礼をしながらこう言つた。

「はじめまして、^{わたし}我が主。ようやくお会いできました」

その声は、鈴の音のように涼やかだった。

05話 遭遇（後書き）

ロボ子つていいですよね。
うちにも欲しい。
次は3日後くらいに。

〇六話 車庫（車庫）

説明回ですかね

「……君は、何だ？」

しばしの沈黙を起き、将貴は口を開いた。

少し前までなら、人形相手に何を話しかけているんだ、と自分に問いただしていただろう。しかしこちらを見ていた人形の目の動きは確かに“興味”を持つて“観察”していた動きであり、目が合つた瞬間、わずかにだが表情が動いたのだ。

少なくともこちらのことを認識する程度の知性があるのでないかと思った。おかしな言い方だが、それが有りうると思う程度には異常慣れしていた。

将貴は立ち上がりかけ 立ちくらみをしたかのように眩暈を感じ、姿勢をくずす。と
ぽふつと柔らかいものに受け止められる。

見ればいつの間に動いたのか、立ち上がった人形の胸に抱きとめられていた。

相手は人形とは言え、急に恥ずかしさを感じ、反射的に離れようとして、その腕で強く抱きしめられた。額にあたる感触で、その胸元に青いクリスタルのようなものがある事に気がつく。そのまま、耳元で囁かれた。

「失礼しました。少し お返しします」

その言葉と同時に、クリスタルと触れている箇所からじわりと暖かいものが伝わってきた。そのエネルギーは、ゆっくりと身体に広がつていく。

「これは……？」

「これは、先ほど主から与えられた 魔力、に相当するエネルギーです。ワタシを形成したうえで、余剰となつたものをお返しします」

「このエネルギーそのものを示す名称は残念ながら知識には無いので、イメージの近いものとして仮に魔力^{マナ}と呼称します、と断りをいれた上でそう言った。

少しの間を置いて、人形^{彼女}は体を離す。

そして将貴は、先ほどまでの疲労感が消え、好調とまではいかないものの体力が戻つてきているのを感じた。

身体の調子を不思議そうに確認しながら、再び尋ねた。

「主とはどういう事なのか。それに今の魔力つていうのは……」

「ワタシは、主のアストラル体そのものです。主がこの素体^{ボディ}に接触してアストラル体と知識を転写したことにより、ワタシ^{ボディ}という自我が発生しました。肉体的な面においてはあくまでこの素体^{ボディ}に依存していますが、アストラル体の面で言うならば主の分身であり、自我と肉体を含めたワタシは主の子供となります」

と、表情こそほとんど変わらないものの、人形^{彼女}は自慢げに胸をはつた。

この世界には所謂魔力^{マナ}の概念に近い性質のエネルギーが満ちており、それを体内に取り込むことで、アストラル体と称する魔力を処理する回路が形成される。アストラル体によつて処理された魔力は基本的に身体能力の強化や回復に用いられるという。

「……それで最近、妙に調子が良かつたのか」

「ハイ。初めの日は、恐らく魔力を攝取したことによるショックと、アストラル体形成の際の反動で倒れたのではないかと」

「何でそれを知つて つて、知識も取り込んだつて言つてたか」

「ワタシには、知識と同時にある程度の経験、記憶も《転写》されています」

「その《転写》というのは？」

アストラル体は魔力^{マナ}をエネルギーに変換するだけでなく、ある種の“機能”を有していた、と人形は答えた。

体内に蓄えた魔力をインクとしてアストラル体という回路のコピー^{ボディ}を素体^{ボディ}に書き込むことで、同時にそれを統括するための自我が発生した。それはつまり、自分のアストラル体を転写^{マネ}するという機能自体を有しているということになり、

「それじゃあ、君自身もその……《転写》、をすることが出来ると

言うことか？」

人形^{彼女}は是、と答えた。

「可能ですが、ワタシという存在を転写した時のよう^{マナ}に、ほぼすべての魔力を消費することになります。主の場合は自我の保持にアストラル体は不要なため疲労ですみましたが、ワタシは自我の維持のために魔力を必要とするため」

転写を行なつた時点で、存在が消失します、と告げた。

それではあまり意味はないな……と思つたところで、ふと気がついた。

「そういえばさつき余つた魔力を返したつて言つたけど、大丈夫なのか！」

将貴の中にある“生命体”という概念とは異なる存在ではあるものの、相手は確かに自我のある存在だと既に認識してしまつている。心配そうな顔を向けた将貴に、人形^{彼女}は首を振る。

「魔力を取り込む機能自体もアストラル体にあるようです。こうして話している間にも、徐々に回復しています。自我とアストラル体の維持のためのリソースは確保されているため、《転写》のような無茶をするか素体^{ボディ}が破壊されない限りは、ワタシが消滅することはありません」

それなら安心だ、と将貴は胸をなでおろした。

「ところで、俺の知識をベースとしているって言つけど、そんなことが出来るなんて全然知らなかつたけど？」

「そう、地球 元いた世界では魔力^{マナ}なんてものは存在しなかつた以上、それがどの様な働きをしているのか、将貴の知識からは説明できるはずはないのだ。」

「そう尋ねると、

「主には見えずワタシが認識できたものを、主の知識の中にあるもので表現しただけです。氷を見たことがない人に氷について聞かれたときに、『水で出来ていて』『冷たい』『固い』ものであると教えるようなモノだと思つてください。」

人形は《転写》という機能について説明したが、それはあくまで自己の存在と、それを生み出したプロセスから逆説的に解釈したものだ。アストラル体や《転写》については、『何ができるか』は分かるもので、『何ができるか』は分からぬといふ。

「《転写》自体、主特有の機能なのか、この世界にくれば誰でも出来るのかわかりません」

「あまり参考にならないのな」

そう冗談めかして言つと、肩を落として落ち込んでしまつたので、慌ててフォローを入れる。

知識は共通していても、精神面ではまだまだ未成熟なようだ。

「そういえば、と氣付く。

「まだ名前を聞いてなかつた。……というか、名前はあるのか？」

否、と首を振る。

「主に付けて欲しいです」

「それじゃあ……」

元の世界の有名な神話に出てくる戦乙女の名。

彼女にはその名が相応しいと思つた。

受け継ぐ者
レギンレイヴ

折角魔法のようなことが出来るようになつてゐるのだ。いろいろと『転写』について実験してみたいところだが、どうもレジイ愛称としてそう呼ぶことにした。を生み出すのに必要な魔力量は相当なものらしく、溜めるのに1ヶ月やそこらの時間は必要らしいという事が分かつた。

ならばなぜこの世界に来てから2週間も経つていないのに『転写』が出来たかというと、恐らく最初のアストラル体形成の際に大量の魔力を吸收したからではないかという。少なくとも今の魔力回復速度から計算すると、それくらいの時間はかかりそうだ。

ただ、魔力回復速度については、ある解決方法があつた。

先ほども行なつたように、レジイと将貴の間では胸元のクリスター

ルを通じて魔力のやり取りが出来たのだ。

同一のアストラル体を持つということは、魔力回復速度も同等ということになる。単純計算で2倍の魔力を吸收出来る。

「このクリスタルは魔力が結晶化したものようです。ワタシの一部として同時に作られたようですが、これがバイパスの役割を果たしているようですね」

魔力を『転写』したとも解釈できます。これは意外に自由度が高いのです、とレジイは言つた。

そして魔力量の他にも、2点ほど『転写』を試せない理由があつた。

一つは《転写》する対象が限られること。

意識はレジィのアストラル体が持つものの、物理的な動作はあくまで素体^{ボディ}のスペックに由来するものであった。つまりは物理的に稼働するものでないと、《転写》は出来ないようだ。これは触れるだけで発動する《転写》に、これまで気づかなかつたことからも裏付けられた。また、独自のアストラル体を持つものに對して上書きとなる《転写》は出来ないだろう、というのがレジィの談だった。死体だったらどうなんだろう、と将貴は一瞬思つたが、怖い考えになりそつたので止めた。

そしてもう一つは、《転写》を行つことでレジィのような存在が生まれるかもしないということ。

レジィ自身についてどういふ言ひつゝもりはまつたくないが、それでも“実験”と称して無責任に人格を持つ存在を生み出すことには少々抵抗があつた。案外レジィは姉妹ができると喜ぶかもしないが

“家族”が増えること 자체はいいかもな、などと呟いた。

07話 邂逅剣戟（前書き）

ようやくバトル回です

ガキンッ！

刃物と刃物がぶつかり合い、派手な火花を散らす。衝撃に痺れる手に顔をしかめながら、将貴は山刀を持ち直す。相手の剣が先ほどから何度も体をかすめたせいで、所々に切り傷が出来ている。

「馬鹿やうつ！ 何してゐつ！！」

離れた所にいたリーダー格が、将貴の前に立つ細身の男に向かって罵声を浴びせる。

「うつかり核に傷を付けて売り物にならなくなつたらどうする！ 手足切り落とすくらいにしておけ！！」

「つと、すんません。それじゃ足、な」

狙いを足元に切り替え、低く雍ぐ男の剣を慌てて後ろに飛び退いて躲すが、わずかに間に合わず腿に鋭い痛みが走つたが何とか堪え、2歩3歩とそのまま距離を取る

「ちつ、案外すばしつこいな……」

男は苛立たしげに舌打ちをするが、すぐには追撃をしてこない。
(今のうちに逃げられるか……?)

将貴は田の前の男から注意をそらさないようになつて、横目で周囲を伺う。

(完全に囲まれてる、かな)

最初に会った時点で、相手は6人。

田の前に1人。その後ろにリーダーらしき男が1人。左右少し離れたところに1人ずつ。残りは視界に入らないということは、恐らく後ろにいるだろう。

細身の男以外は今のところ様子見のつもじらしく距離をとつて見

ているだけだが、いつ手を出してきてもおかしくないだろ？

（……レジイと離れるんじゃなかつたな）

1人で切り抜けるのはかなり難しい状況だ。置いてきたレジイが気づいてくれることを祈りつつ、別行動を取つたときのことを思い出した。

「そのボディって、結局何なんだか分かるか？」

洋館の探索を再開した将貴は、隣を歩くレジイに尋ねる。

「俺が覚えている限りじゃ、そんなロボットはまだ作られてないと思つんだけど」

最先端と言われる技術でも、なんとか2足歩行をこなす程度だったはずだ。

一方のレジイの動作は、関節の構造上人間そのものとは言えないにしろ、人と遜色のない滑らかなものだつた。

それにその人間そのもの　いや、人間離れした整つた造形は、機能を突き詰めきつていらない現代の技術力では無駄でしかない。デザインに力を入れることが出来る水準にはまだ達していないはずだ。『申し訳ありません、主。もう少しこの身体の扱いに慣れれば、内部のメモリも調べることが出来ると思うのですが』

「そんなこともできるのか？」

「ハイ。本質的には駆動系を操作すると変わりません。ただ構造としては遙かに纖細ですので、もう少し馴染まないことには……」

レジイはそう言って、申し訳なさそうに肩を落とす。

「いや、そんなに急ぐことはないわ。それにここを調べれば他にも手掛りがあるだろ？　……つと、次はこの部屋を調べよう

将貴はまだ入つていなかつた部屋を見つけ、ドアを開けた。

「……やつぱり、ここは地球とはまた別の世界から来たのかも知れないな」

謎の球体を動力源として光る懐中電灯に似た道具を手で弄びつつ、将貴は呟いた。

「別の、世界ですか」

「もしかしたら未来かもしれないけどね。元いた地球と、ここ。少なくとも2つあるんだ、3つ目があつてもおかしくないんじやないかな」

懐中電灯もどきに入っているのと同じ球体を放り渡す。半透明のビー玉に似た光沢を持つそれを、レジィは光に透かしたり、角度を変えたりしてまじまじと眺めている。

「ここにある道具はだいたい皆それで動くみたいだし、結構発展してた世界なんだろうな」

役割としては電池と同じようだが、共通規格のようで使いまわせるのはとても便利だ。壊れているのか、スイッチを入れても動かなかつたものから取り出したそれ 見た目から、結晶球とでも呼ぶことにする。そのまんまだ をいくつか、予備としてポケットに仕舞った。

「さて、と。素人がパツと見で使えそうな物はだいたい見つけたけど、このまま帰るだけってのもちょっと惜しいな……」

先のライトを始め、電気がないために使えなくなつたもののうち、いくつかの代用品を見つけられたのは有難かつた。未使用的結晶球が大量に入っているケースも見つかった。

「惜しい、ですか？」

同じように見つけ出してきた大型のリュックサックに発掘品を詰めながら、レジィは首をかしげた。

「スイッチを入れるだけならいいんだけど、ちょっと操作が複雑で何に使うか分からぬものがいくつかあつたからね。もしかしたら

便利なものかもしれないし、使い方が分からないうつてだけで置いていくのもな」

腰を据えていろいろ試すには食料などの準備不足だが、かといって持つて帰るには数が多い。拠点から距離があるので、往復するのも少々骨が折れると、なんとももどかしい。

「せめて文字が読めれば」

説明書きがついている物もそれなりにあったのだが、肝心の文字が読めないという問題もあった。

「主」

腕を組んで考え込んでいる将貴に、レジィが声をかけた。

「少し時間をいただければ、文字については調べられるかもしれません」

「そうなのか？」

「ハイ。このボディのメモリ解析が進めば、恐らく文字も“思い出せる”かと」

基本的に将貴と共通の知識を持つはずのレジィだったが、時間が経つにつれてそれとは異なる記憶がぽつぽつと湧いてくることに気がついていた。それは恐らく、ボディとの一体化が進み、この身体のメモリに残っているデータを記憶として読み取ることが可能になつているのではないか、と仮説を立てていた。

それを聞いた将貴は少し考え、レジィに今後の方針を提案した。

将貴は一人、森の中を歩いていた。近くにレジィの姿はない。レジィは一人洋館に残り、探索の続きを行つ。その間将貴は、森の向こうを調べることにしたのだ。

将貴の向かう先。疎らな木々の間から、それが見えていた。

一筋の煙。

細くたなびくそれは、恐らく焚き火によるものだ。

将貴はその場所を目指していた。

広場の真ん中にある焚き火を囲んで、6人の男が思い思いの格好で座っていた。

4人が何かの革で出来ているらしき軽鎧、残りの2人がローブを羽織った格好をしている。手元を見てみれば軽鎧の4人は皆、両手持ちサイズ長剣や片手剣、小型の盾などで武装している。ローブの2人は目立つ武器こそないものの、それぞれ大振りな杖を1振りずつ持っていた。

（いかにもファンタジー物に出てくる冒険者って感じの格好だな）

広場が見渡せるギリギリの距離にある茂みに、将貴は息を殺して身を伏せていた。

洋館から離れること半日近い距離。焚き火を囲んでいる人間が視界に入ったとき反射的に声をかけそうになつたが、相手が武装している事に気づいたので先に様子見することにしたのだ。 声をかけてみたら相手は盗賊、襲われました身ぐるみ剥がされました、では笑えない。

だいたい言葉が通じるか 普通に考えれば通じない可能性の方がはるかに高いのだ。ファーストコンタクトの相手は慎重に選ぶ必要がある。将貴としては、人がいることを確認できただけでも結構な収穫だ。

しばらく様子を見ていた限り、盗賊と聞いて思い浮かべるような粗暴な連中ではなく、荒事に身を置いていてもそれなりに真っ当な人間であるらしいと将貴は感じた。と言つても、会話をしているときの仕草や表情、武器の手入れをしている振る舞いからの印象ではあるが。決して上品とは言えないが、少なくとも理性的ではあります。

眺めているうちに、冒険者グループの様子が変わった。どうやら移動するらしく、何人かが荷物をまとめ始めていた。

会話の中心になつっていた壮年の男がリーダー格らしく、周囲に指

示をだしている。

話しかけられたロープの片割れが頷き、杖を田の前に掲げたのち、その先端で地面を叩いた。

トーネン……

急に身体を波のようなものが通り抜け、固い木で石を叩いたような音が聞こえた気がした。

不思議な感覚に身を強ばらせる。広場の方に視線を向けると冒険者グループが揃ってこちらに目線を向けていた。

（まずいっ！？）

反射的に下がろうとした瞬間、やや短い杖を持ったもう1人のロープがこちらに杖を向けた。

急に体が重くなる。周囲の木々や草も上から何かに押さえつけられているかのように、その枝葉が垂れ下がっている。こちらの位置を正確には掴んでいないのか、半径5m前後の範囲が力の範囲になつているようだ。身動きが出来ないほどではないが、遊園地の遠心力系のアトラクションに乗つていてるときのような圧力が体中にかかるおり、移動しようとした出鼻をくじかれた。

重圧は10秒ほどで消える。だが、その時点で既に追いつかれていた。

見つかったものは仕方ない。どうせ誰かに接触するつもりだったのだ、ここは友好的に話しかけてみよう。そう思つて立ち上がったところで、田のあつた男の表情が変わったのに気がついた。

「……リーダー」

細身の男が、こちらから田をそらさないまま、後ろから近づくリーダーに声をかけた。

意味の分かる言葉だつたことに少なからず驚いている将貴に対し、腰から抜いた剣をゆっくりと突きつける。

「ラッキーすよ。ハグレの“忌み人”っす」

「……ほう」

リーダーだけでなく、追いついてきた他の男達もゆっくりとこちらを包囲する位置へと移動する。全員の視線がこちら。いや、頬の紋様に集まっているのに気付き、将貴の背を冷や汗が流れた。

（畜生、問答無用の流れかつ！）

この時点で将貴は、和解の可能性は消していた。

どういう意味なのかは分からないが、こちらに向けられた“忌み人”という言葉の禍々しい響きに、この紋様は相当厄介なものらしいと感じた。

幸い全員で一斉にかかるのではなく、最初に相対した細身がこちらを狙い、残りがバックアップ兼索敵の役回りとなつたようだ。細身は一番の若手らしく、動きも荒い。若干身体能力の上がつたおかげで素人の将貴でもなんとか今のところはやり過ごせているが、じわじわと流れる血と傷の痛みが集中力を奪い、さらに傷を増やす羽目となつていて。さらに言えば、目の前の相手を倒せたとしても後にはより腕の立つであろう相手が5人も控えており、逃げ出すことも出来ないという状況が精神的にも負担をかけていた。

「ちつ、すばしっこいなコイツ……！」

若干息の上がつてきた細身は、苛立ちを隠せない様子で悪態をつく。それを見ていたリーダーは小さな笑みを浮かべる。

「どうした、手こずつてるな。手伝うか？」

「いらないっすよ！ すぐ終わらせます！」

怒鳴り返して、大きく踏み込んだ突きを肩口に放つ。

線で捉えられる降り下ろしや薙ぎ払いに比べ、突きを捌くのは確かに難しい。線の攻撃に目が慣れてきた事もあり、反応が遅れて掠つてしまつ。

将貴が突きに不慣れな事に気づいた細身は、口元に笑いを浮かべ

て刺突重視の攻撃に切り替えてきた。もはや捌くのではなく必死の逃げの体で距離を取ろうとするが、1発、2発と体を掠めていく。この段階になつて、相手は若干遊びが入つてきたおかげで辛うじて躲せているのが皮肉だ。

だが、それでも。

痛みが走つた足を反射的に庇つたせいで体勢が崩れ、その太ももを白刃が貫いた。

「づあッツツツツッ！！」

激痛のあまり目の前に火花が散り、喉の奥で絶叫が弾ける。崩れ落ちた将貴の喉元に、剣が突きつけられる。

「よし 首枷持つてる奴いるか？ ないならロープで縛つとけ。あー、あと止血な。治癒は拘束してからだ」

リーダーが武器を収め、周囲に指示を出し始める。

倒れたままの将貴は、痛みを堪えて荒い息を吐きながら、せめてもの抵抗にと剣を突きつける細身を睨みつけた。

細身はサディスティックな笑みをニヤニヤと口元に浮かべ

ドツ

鈍い音とともに、その胸元を突き破つて刃が顔を出す。

飛んだ血飛沫がわずかに顔にかかり、将貴は顔をしかめた。何が起こったのか分からぬ。そんな表情で目を見開いたまま、細身はゆっくりと倒れた。

周囲に弾ける怒声。素早く臨戦態勢を取る男たち。

その向こうに、機械のように無表情なレジィの姿があつた。

07話 邂逅剣戟（後書き）

指摘・感想お待ちしております

お気に入り登録感謝しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7976z/>

レギオンの将

2012年1月8日23時45分発行